

短歌

令和八年度
第五十五回阿南市短歌会春季大会選

特選 冬枯れの固き田の面に山鳩の何を啄む小

雪舞う朝 亀島賀陽子

特選 場内を総立ちさせし「りくとりゅう」止

まぬ歓声抱き合う二人 佐野 幸子

特選 早朝の空へ向って背伸びする自分ひとり

の静かなる時 宮崎眞由美

特選 吟行という名で会える人がいる傘寿と喜寿

の恋だとしても 小畑 定弘

特選 プレートに五品を盛って春光の射し入る

窓辺へひとりのランチ 中原きみ子

特選 夫作る大根太くなりたれど私の足にはま

だまだ勝てず 山本 賀代

特選 トランプの機嫌で決まる関税のコーヒー

一杯大寒の朝 吉形 和恵

特選 向き向きの履物そつと揃えいる塾の入口

わが娘の仕草 竹田 雪湖

特選 歩夢くん負傷を推して出場すミラノの空

をハーフパイプは 青木 弘子

入選 凍て雲を見ながらめざすマイホーム辿り

着いたら寝ぐらがあるぞ 安本 生美

入選 送り来し靴下の色レインボー老け込まぬ

よう娘のメモ添えて 森 ゆき子

入選 万葉の和歌書くごとし藍の空に濃淡妖し

く雲の連なる 西條 悦子

入選 玻璃越しの日光浴花びらが舞いとぶよう

に雪降り始む 棚野 久子

俳句

阿南市俳句連合会 選

迷い来しとんぼに一夜添寝する

駒木 幹正

蝉しぐれ瘦せたる母の手を握り

形部 秀樹

鎮魂と平和を祈る終戦日

山野 賢治

農作業塩辛とんぼ穂で休み

岩佐 芳昭

釜揚げにきゅつと酢橘の香りあり

上荷 千賀

沙羅薔真珠のやうな玉連らね

鎌田 黄鳥

畑隅の檻にガサゴソ今朝の秋

近藤ヤス子

祖父母父母の戒名佳きや霊祭

陶久 晴義

突風に稲穂大きく波打てり

多田紀久代

朝顔の荳数へて明日を待つ

石井 政子

川柳

阿南川柳会 選

亡き母は苦楽に耐えた強い人

表原 節子

ごつごつの父の手包む旅の朝

神野 鈴代

苦も楽も一筋の川人生は

鈴木レイ子

苦勞などありませんよと妻の言う

多田紀久代

こりこりだ添い寝の妻の彼の寝言

西田 修身

身の丈のおしゃれ苦楽を友にする

野村 敏子

懲りずまた五年日記を買う賤布

橋本 征介

一般応募

音読で記憶昔の顔を出す

島尾美津子

考えて考えてキラキラネーム

武田 敏子

亡き人の命の如く蛍舞う

泰地 重美

漢詩

阿南漢詩研究会・青松吟社 選

秋日郊行

増喜 泰典

西郊十里撼秋情

西郊十里 秋情を撼かし

蔽野晚煙紅日傾

野を蔽う晚煙 紅日傾く

收穫田園人已去

收穫の田園 人已に去り

望陽凝紫暮山橫

望陽たり 紫を凝らす暮山横たう

青木弘宣氏の捕虜一號顯揚の著作に寄す

松原 伸夫

戰裏虜囚堪汚名

戦裏の虜囚 汚名に堪え

不羈愛國毅純誠

不羈國を愛して純誠毅し

顯揚一卷加青史

顯揚の一巻 青史に加え

委曲傳眞衆目驚

委曲眞を伝えて衆目驚く

貧に慣る

田中 公

草間蝸舍適斯身

草間の蝸舎 斯の身に適い

些樂春秋慣素貧

些か春秋を樂しんで 素貧に慣る

香味甘粗口中食

香味粗に甘んず 口中の食

不憚不拂弊衣塵

不憚不拂 弊衣の塵

※蝸舎―かたつむりの殻のような小さな家

